
絵本を追うしゃちょう

相坂夏々士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絵本を追うしゃちょう

【Nコード】

N8396H

【作者名】

相坂夏々士

【あらすじ】

「しゃちょう」と呼ばれる初老の男が、過去の失敗を責められ、自責の念も相まって、自殺を図ろうとする。いざ死のうと思った時、ふと幼い頃の記憶が蘇った。母親との思いでの絵本が頭をよぎったのだ。そこで、今は手元がないその絵本を探す冒険に出てやろうと決意する。

ブログ（前書き）

初めての投稿です。感想なんかを気軽にいただけたらな、と思って挑戦してみました。最後まで頑張りますので、よろしく願いします！！

プロローグ

プロローグ

初老の男は周囲の人間から「しゃちょう」と呼ばれていた。

最初のうちは、本人もその呼び名に親しみを覚えていたが、次第にその呼び名の奥に蔑みの意が込められるようになるのを感じていく。そうになると、「しゃちょう」は自分を呼ぶ、全ての声が怖くなってしまう、自分の部屋から出られなくなってしまうたのである。

たしかに彼はとても大きな規模の会社の社長をしていて、本当の意味で「しゃちょう」と言う呼び名にふさわしい男だった。もっとも、それは過去の事。ちよつと昔のことだ。

「しゃちょう」は数年前に経営していた会社を破たんさせてしまっていた。何千人何万人と言う人たちが路頭に迷う、当時としてはかなり大きなニュースとして世間を賑わした。

その後、彼は街の人たちの好意で、運良く町長をさせてもらえることになり、「しゃちょう」自身は辛うじて路頭に迷うことがないままに、事なきを得たのだった。さらに、街の住人達からは「しゃちょう」と呼ばれ、慕われていた、と思い込んでいて、本人にしてみれば、そこそこ幸せな生活が出来ていた。

しかし、そんな彼が前述の通り、自宅にひきこもるようになってのは街の中年女性たちによる、井戸端会議での会話を耳にしまったのが原因だった。

その日は、朝から天気良かった。しかし、今朝見た天気予報が示していたように、心なしか天気が崩れてきそうな、どんよりとした色の雲がのろのろとした風に流されて、嫌な生暖かさが立ち込めていた。

そんな折、「しゃちょう」は街のパトロールに出ていた。

これは彼の日課のようなもので、これは町長の仕事ではなく、雇ってくれた住人達への感謝のしるしとしての行いだった。本当に感謝していたのだ。なのに……あんな会話を聞くはめになるなんて。

街の中心には、中流階級の奥様方が憩う、町立のテラス付きレストランがある。

「しゃちょう」はそこで信じられない話を聞いて、ショックを受けた。

テラスには3人の奥様方がいた。

円卓の騎士さながら、それぞれ堂々としたたたずまいである。

「あー、それにしても「しゃちょう」には腹が立つわ！」とファンデーションのマスクを被った奥様が、乱暴にコーヒークップをテーブルに置く。カップからは黒い波がたち、少し零れた。

「あら？　どうかしたの？」

比較のおっとりしていそうな奥様が不思議そうに聞いた。

もう一人はこの店特製のパスタを食べるのに必死で、まるで話を聞いている。

「どうかしたの？　じゃないわよ！　あの男、いつまで街の人たちの好意に甘えているのかしら！　ずうずうしいわよねえ、ホント

むかつくわ。だって、考えてもみて！ 会社を破たんさせて、路頭に迷った人たちの事なんて、きつと忘れてるんだわ。噂によればワンマン社長だったらしいから、当然と言えば当然かもしれないけど」と鼻息荒く、今度は乱暴にコーヒーを飲み下した。

しかし、おっとりした奥様ははつきりと同意はしなかった。何故なら、このご立腹奥様は自分の主人が町長になるものと思って、今まで生きてきたことを知っているのだ。数年前の町長任命の時にも、唯一猛反対している彼女の姿を観たのを覚えているのだ。

「あの後、たくさんの人が自殺したって聞いたわ。あんな奴、人殺しじゃないの！ 悪魔よ！ ああ、考えただけでも恐ろしいわ、あんな奴が町長だなんて。あなたもそう思うでしょう！？」

物凄い剣幕で言われ、思わず頷いてしまうおっとり奥様。

もう一人は相変わらずパスタを食べている。いつの間にか違う種類のパスタに変わっていた。

この何気ない会話が、「しゃちょう」を酷く傷つけた。

それまでも、普通ならば、気にも留めないような事でさえ、「しゃちょう」は傷ついていた。彼はずっと罪悪感にさいなまれて、生きてきたのだ。ご立腹奥様の言うように、彼の側近だった優秀な部下も、数名自らの命を絶ったのを知っていたし、今でも次の職にありつけず、一家そろって路頭に迷い続けている連中の事も知っていたのだ。

しかし、このご立腹奥様の「人殺し」や「悪魔」はひどく堪えた。

放心しながらも、彼はパトロールを続けた。いつもなら、自ら進んですれ違う人たちに笑顔で挨拶をするのだが、この時ばかりは視線

が怖くて堪らなかった。

あんな話を聞かされると疑心暗鬼に陥るものだ。すれ違う人々の目が「お前は人殺しなのだ」、

「お前は悪魔なのだ」と言っているようで、怖い。しかも、少しずつ症状はひどくなっていき、やがて、幻聴までも聴こえて来た。「しゃちょう」は耳をふさいで走った。走って、走って、自宅へ向かった。その間、何度転んだかわからない。でも、走った。街の人たちの心配そうな目さえも、この時の彼には蔑みの象徴にしか思えなかった。

「きつと、子供たちも、お年寄りたちも、「しゃちょう」と言っているの中では「人殺し」だと思ってたんだ。「悪魔」だと思っていたんだ！」

自宅に入るなり、彼は自宅唯一のドアに板をいくつも打ちつけた。さらに、家中の家具——と言っても、質素な生活だったため、せいぜい大ぶりのベッドとちゃぶ台くらいのも——を使ってバリケードを施した。

そして、密室と化した自宅にこもり、3日間泣きあかした。

「ごめんよ、みんな、ごめんよ」

子供のように泣きじゃくる「しゃちょう」。かつての社員たちに対する自責の念だった。

「もう、死のう……」

涙が枯れると言うのを、生まれて初めて知った「しゃちょう」は自

殺をはかることにした。が、どういいうわけか多量の睡眠薬を前にすると、頭の中に不思議なものがちらついて薬を飲む事が出来ないのだった。その不思議なものに、記憶があった。

それは「しゃちょう」が幼い少年だった頃、毎晩のように母親に読んでもらっていた絵本だった。当時は決して裕福な生活などしていなかった「しゃちょう」。それでも幸せいっぱい満たされていたのは、優しい母親と、その絵本があったからだ。父親は暴力をふるう、最低の人間だったが、ほとんど家にいることはなく、「しゃちょう」少年は大抵、大好きな母親と2人で過ごすことが出来たのである。

「はて、絵本は何冊あったかなあ」

つい今の今まで自殺をしようとしていた彼は、妙に気になって絵本の事を思い出そうと躍起になった。何冊があったのだが、いよいよ生活費もぎりぎりになった、という時に泣く泣く母親が売りに出してしまったので、彼のもとには今、一冊もない状態なのである。

「うゝむ、気になって自殺どころじゃなくなった。これじゃ死んでも死にきれない。よし、どうせ死ぬなら、全部の本をみつけてやろうじゃないか！ 一体いくつあったか覚えてないが、たしか全部の本に、ワシの名前が書いてあるはずだ！！ よし、どうせ死ぬんだ、やりたいようにやってやる。世界中回って全部集めてやるんだ、そうと決まれば、この街ともお別れだ！」

こうして、「しゃちょう」は一体いくつあるのかもわからない思い出の絵本を探す旅に出ることを固く心に決めたのである。

つづく……

第1話 「夜の盗賊団」 (前書き)

思いつきで書いているので、矛盾が生まれるかもしれませんが、楽しんでいただけたらなあと思います。

第1話 「夜の盗賊団」

第1話 「夜の盗賊団」

「しゃちょう」は頭を抱えて、バリケードだらけのドアの前で座り込んでいた。

別に出られない事に絶望しているわけではない。ただ、どこへ向かうべきなのかを決めかねているだけなのだ。何しろ、絵本は一体何冊あるのかもわからないし、彼の母親が「何時」、「何処」で「誰」に売ったのかさえわからない。そして、今もその当時の買い手が持っているとは限らないのだから、無理もないことだった。

「しゃちょう」の記憶をたどれば、少年時代に毎晩のように読んでもらっていた話はかなりの数だった。何と言っても、毎晩違う話を聞かせてもらったのを、彼ははつきりと覚えている。

今でも覚えている話を指折り数えて見れば指が何十本あっても足りないくらい。とにかく毎日新鮮な話を聞かせてもらっていた。

「どうしよう……」

この日、何度目かのため息をついたとき、外から何やら話声が聞えて来たのに「しゃちょう」は驚いた。時計の針は4時をさしている。辛うじて存在している天窓からは星が見えているから、真夜中のはずだ。この街は夜の12時を回ると誰も外に出なくなる。と言うのも、最近、国中を荒らしまわる盗賊団が出回っているからであった。

噂によれば盗賊団は、とても暴力的で、わがままで、毛むくじらの大男で、醜いらしい。

（もしや、例の盗賊団では……？）

「しゃちょう」の好奇心は頂点に達した。

気になる。だけど、バリケードが邪魔で、覗き穴が遠い。かと言って、のけようとして物音をたてれば、きっと殺されてしまう。どうしたものかと、再び頭をかかえる「しゃちょう」。

（くっ、自殺まで考えたこのワシだ！ 今更殺されるくらい、なんぼのもんだ！ 何なら成敗してくれるわっ。こっ見えても若い頃は「暴君」と呼ばれておったのだ！！）

鼻息荒く、バリケードを壊し始めた。

貼り付けた板をはずすのに、どうせ、もう出ていくから、という理由で電動ノコギリを使った為、静かな街中にけたたましい騒音が溢れてしまった。しかし、覚悟を決めた「しゃちょう」は動じない。気にも留めず、最初の第一歩を踏むために、文字通り壁を乗り越えようとしている。

「ふはは、やったぞ！ ワシはひとつ壁をぶっ壊した！」

「しゃちょう」は意気揚揚と、肩で風を切りながら、外に出た。

早朝特有のひんやりとした風が肌を刻む。ぶるつと身震いをしたものの、「武者ぶるいさ」と鼻で笑い飛ばす「しゃちょう」の眼は希望に燃えて光っていた。

ドアを大胆に壊して、仁王立ちして笑っている「しゃちょう」に驚いている人がいた。それも1人じゃなく、3人。しかし、暗くて顔はよく見えない。

「しゃちょう」も彼ら——もしくは彼女ら——も目を細め、お互いの姿を確認しようと顔を突き出している。はたから見れば実に滑稽な様子だが、彼らは真剣だ。

次第に目が慣れてくると、「しゃちょう」の目には3人の少年が映った。

どの顔も愛嬌のある感じで、思わずお小遣いをあげたくなるような風貌をしていた。が、彼らは不自然なほど膨らんだリュックサックを背負っており、「しまった」と言う表情を見せていた。

とにかく、それまでに「しゃちょう」が耳にしていた噂の風貌とは似ても似つかない3人で、「しゃちょう」は思わず噴き出しそうになった。

「あちゃ〜、どうする？ 見られちゃった」

頭にバンダナを巻いた少年が他の2人に目くばせする。すると、小柄な少年が「どうする？」ともう1人の眼光鋭い大柄な少年を見上げる。大柄な少年は何も答えず、ただ「しゃちょう」を見つめている。その眼は不思議と威圧的ではなく、また攻撃的でもなかった。

「あんた、家を壊して出てきた」

大柄な少年が無表情のまま呟いた。「ああ、そうさ」と「しゃちょう」は胸を張った。そして、

「君たちは……有名な盗賊団かい？」

と温かい笑みを向けた。すると、小柄な少年が可愛らしく頷いた。それを大柄な少年が小突く。

「こら、誰にでも正体を明かすんじゃない」と戒めたのだ。

「なあに、別に警察に突き出そうだななんて思っ
てないよ。むしろ、仲間に入れてもらいたいくらいさ。」

「しゃちょう」の言葉に3人は反応した。いまいち意味がわからないようだ。

この3人なら話してもいい気がして、「しゃちょう」は全てを話してみることにした。

「へえ」

「思い出の」

「絵本かあ」

3人はそれぞれ関心したように「しゃちょう」を見つめる。興味を示したのだろうか。

「そこで、ワシを仲間に入れてはくれないか？ 君らは世界を回っているんだろう？ それに何かと役に立つと思うぞ？ 大人が1人いれば、それまで届かなかった痒みに届くようになるかもしれないし」

破壊されたドアのすぐそばの3段ほどの階段に腰を下ろした「しゃちょう」が声を殺して、3人に持ちかけた。今の自分には「勢い」があるが、それを維持するためには外からの「勢い」が不可欠だと踏んだのだ。

「下っ端だぞ？」

大柄の少年が訝しげに「しゃちょう」を覗き込む。
バンダナの少年はただにこやかに笑っている。小柄な少年は、眠いのか時々目をこすりながら、一生懸命に話を聞いている。

「構わんさ。君らの方が先輩なんだからな。それに平社員に戻ったみたいで新鮮だ」

と目を覚ましたばかりの朝日に向かって、一通り笑いあげた後、「交渉成立、だね？」と右頬をくいと持ち上げ、いたずら坊主のような笑みを3人に向けた。

「さてと、長居しちまった。んじゃ、そろそろ逃げますか！！」とバンダナの少年が呑気に笑う。「よろしくね、新人くん！」と小柄な少年が「しゃちょう」に手を伸ばす。「しゃちょう」も照れくさそうにその手を握る。

「じゃあ、行くぞ！！ 野郎ども！！」

幸先よく、仲間を手に入れた「しゃちょう」だったが、果たして首尾よく事を進められるのだろうか。「しゃちょう」の冒険は始ったばかりなのだ。

つづく……

第1話 「夜の盗賊団」(後書き)

気軽に感想いただけたらなあと思います。鋭い感想や厳しい感想、何でも素直に受け入れますのでよろしくお願いします!!

第2話 「地図には載ってないはずの街」

第2話 「地図に載ってないはずの街」

「しゃちょう」が街を飛び出してから、1時間後、街は大騒ぎとなっていた。

「おい、「しゃちょう」が行方不明だそうだ」

「何でも例の盗賊団にさらわれたんじゃないかって噂だぜ？」

「ホントだって、嘘だと思うならゴトーの婆さんに聞いてみるよ。朝早くに何者かが「しゃちょう」の家のドアを電ノコでぶっ壊してるのを見たって言ってたぜ」

そんな噂でもちきりだったのだ。

噂が噂を呼び、とうとう「しゃちょう」が殺されたという説まで出てしまった。が、当の本人はそんなことになってるだなんて思いもしない。

街を出て、次の目的地も定まらないままに、4人は観光者を装いながら歩いていた。

大柄な少年、リュウタは大きな地図を広げて、歩いている。「しゃちょう」は「よく前も見ないで転ばないなあ」と感心しながら彼の大きな背中をながめている。小柄な少年、ユウキは「しゃちょう」と手をつなぎながら眠そうに歩いている。一方、バンダナの少年、カズキは相変わらずマイペースに、ニコニコと3人から少し後ろを歩いていた。

「ところで、君たちはどうして盗賊団なんかになったんだね？」

「じゃあ、質問に質問で返して申し訳ないが、おっさんは何でついできた？ 俺らに偶然会ったから？ いや、違う、これら全て運命なのさ」と芝居めいた口調でカズキがバンダナを揺らしながら笑った。盗賊団になったのも運命だと言いたいらしい。

「ホントはね、俺たち大きな船が欲しいんだ」

ユウキは「しゃちょう」を見上げて言った。まるで、クリスマスの夜に床に就く前の幼子のような目をしている。「船？」「しゃちょう」は首をかしげた。

「ユウキっ！ お前は本当に何でもかんでも喋るんじゃない！」

地図を見たままのリユウタに叱られ、肩をすくめるユウキ。彼を飛ばうようにカズキが、

「いいじゃないか。おっさんも仲間なんだしさ」

とフォローを入れた。すると、リユウタもそれ以上ユウキを責めることはなかった。

「どうして、船が欲しいんだ？」

「それはね、おじさん……俺たち、本気で世界の果てを見てみたいんだ。ほら、本に載ってる地平線の写真ってあるでしょ？ その先をこの目で見てみたいんだよ。歴史上ではわかりきってる事かも知れないけど、俺たちはまだ見たことがないんだ。そんなの悔しいじゃないか」

ユウキの声が弾む。彼のソプラノボイスはよく通るし、聴いていて爽やかな気持ちになる。その声に「しゃちょう」が耳をすましていと、ユウキは続けて、

「でも、世界を周り切られるような船は高いんでしょ？　だから、俺らにはお金が必要なんだ」

と「しゃちょう」に訴えかけるように、言う。その迫力に押されて、「しゃちょう」は頷いてしまう。

「ほら、余計な事を言ってる間に目的地に着いたぞ」

リュウタの不機嫌そうな声がする。いつの間に目的地が決まっていたのか定かではない。おそらく、リュウタは地図を見ながら、一人で目的地を決めて、先頭を歩き、自分たち3人を誘導したのだろう。「大したものだ」と「しゃちょう」は誰にともなくつぶやいた。

リュウタが示した街は、「しゃちょう」のいた街——クワガタ町——のすぐ隣のゴミムシ町だった。「しゃちょう」がまだ本物の社長だった頃、よく遊びに来ていた街だ。ギャング、ドラッグ、人身売買……。暴力が支配すると言った、すっかり手垢のついた表現がピッタリのアnderグラウンドな雰囲気である。

しかし、こんな危険な街をこんな15歳やそこの少年が知っているのが「しゃちょう」にとって一番の驚きだった。この街の存在を知るのは、この世の酸いも甘いも知りつくしたような、莫大な金を自在に動かせ、一度パチンと指を鳴らせば、いとも簡単に人ひとりを抹消出来る程の力を持つ者に限られているはずなのに。「しゃちょう」がこの街を知っているのは、当然、「しゃちょう」自身もか

つてはそれ程の力を持っていたと言う事に他ならない。

「よくこんな街を知っていたな、リュウタくん」

「しゃちょう」が目を丸くして声をかけると、顔をそむけて、

「へっ、全部この地図に載ってるんだよ」と言った。「しゃちょう」が地図をのぞいてみると、たしかにゴミムシ町の名前が記されていた。とつさに「ただの地図じゃない」と「しゃちょう」は思った。国のルールでその街の名を記載することは固く禁じられているはずなのだ。

つまり、彼が持っている地図は裏の世界の人間が作成した闇の地図だろう。

「その地図をどこで？」

「しゃちょう」のその質問には答えず、リュウタは先にゴミムシ町に入って行ってしまった。

カズキやユウキの顔を見るも、2人とも何も言わずに、ただ笑うだけだった。

慌てて「しゃちょう」も3人を追って暗黒街に入って行った。

つづく……

第3話 「未来は僕らの手の中・前篇」(前書き)

はい、またもや大好きなブルハからタイトルを勝手に貰いました。

第3話 「未来は僕らの手の中・前篇」

第3話 「未来は僕らの手の中（前編）」

街は、かつて「しゃちょう」が訪れた時と変わっていなかった。

街唯一の入り口のすぐそばにある、堂々たる佇まいのカジノビルは、どこことなく血生臭いオーラが漂っており、その街の不気味さを象徴するかのようであった。

「何か怖いね」ユウキが「しゃちょう」の服の袖をつかむ。

先に入っていたリュウタが振り返り、「しゃちょう」に向かって無言のまま、1枚の紙切れを渡した。「しゃちょう」は受け取った紙を広げ、首をかしげた。

「なんだ？ これは」

「おっさん、アンタの仕事だ」

リュウタは当然だと言わんばかりの鋭い目つきで言い放つ。この、有無を言わせぬ物言いは20も30も年上の「しゃちょう」でさえたじろぐ程の凄味だった。

紙に書かれていたのは、

『カジノビル。VIPルーム最深部。金庫。盗む』

と言う、切れ切れの文字の羅列だった。

おそらく、目の前のカジノビルに忍び込んで、奥にあるVIPルームの更に奥にある部屋に入り、金庫を盗んで持ってこい、という事を示しているのはわかった。

が、物理的に可能なのだろうか。「しゃちょう」は急に不安になった。

カジノビルは24時間、365日ずっと運営している。

ましてや莫大な金を管理している場所とえば、ほぼ100%の確率で厳重という2文字をいくつ重ねても足りないくらいの、固い守りが待ち受けているに違いないのだ。

「もし、その仕事を達成したら、おっさん、アンタが探している絵本と一緒に探してやるよ」

リュウタは「しゃちょう」をまだ正式に仲間と認めたわけではなかったのだ。

それを理解した「しゃちょう」は重々しくも、頷くしかなかった。

「タイムリミットは明日の朝5時まで。もし、それまでに達成できてなかったら、おっさんを置いて、俺らは先へ急ぐ」

リュウタは吐き捨てるように言った。あえて突き放していると言った方が正しいのかもしれない。何にせよ、リュウタの目は真剣そのものだった。

「しゃちょう」は3人に背を向け、とぼとぼとカジノタワーに入っていく。

その何とも頼りない後姿を見つめながら、「大丈夫かなあ」とユウキがつぶやいた。

「いいのか？ あのおっさん、きっと失敗するぞ」カズキも心配しているのだろう、リュウタに詰め寄る。しかし、リュウタは無言で「しゃちょう」の背中を見つめている。

そんなリユウタにしぶれを切らしたのか、珍しくカズキが取り乱す。

「おいつ、ここは普通の街じゃねえんだぞ！！ この街でひとつミスをする、ってことはひとつ命を失うって事なんだぞ！！ あんな大きなヤマ、ひとりで大丈夫なわけないだろう」

声を荒げるカズキ。それでもリユウタはカズキを見ない。

そのかわり、ユウキの肩を軽くたたき、「あと15分したらおっさんの後を追ってくれ」と耳打ちした。しかし、リユウタの意図がわからず、ユウキは曖昧な返事をした。

「しゃちょう」はカジノタワーの1階フロアで、少しばかりの持ち金をカジノ専用コインに換えていた。彼の全財産はカジノ専用コイン3枚にしかならなかった。

（こうしてみると、破産してからの数年の努力って何なんだろうな……。一生懸命に働いて、その結果が、この街ではこれだけの価値しかないとは……）

金と暴力が支配する街では、平等などという言葉は無意味である。力と運を持っている者は勝者、それ以外は全て敗者と言う、普通では考えられない不条理な世界があるのだ。そう思うと、「しゃちょう」はやりきれない思いでいっぱいであった。

「さて、と。とりあえず、このフロアから見て回るか」

早速、情報収集を試みることにした。

1階フロアにはスロットやカードなどのギャンブルが行えるらしく、それら専用の機械が、広々とした室内に、カマキリの子の如く設置

されていた。

このフロアには警備員が10名ほどいる。もしかすると、私服警備の者もいるかもしれない。何しろ、裏社会きつての遊び場だ。自分の目的が彼ら——カジノ側の人間——にばれると言う事は

死を意味することを、「しゃちょう」は知っていた。数年前に訪れた際に、何人もの人間が目の前で始末されるのを見ていたのだから、内心穏やかではない。

カジノタワーの5階までは一般の客も簡単に訪れる事が出来る。

しかし、5階から6階へと続く階段前の扉の前には、屈強な番人が2人立っていて、あるものを持っていない人間を絶対に通さないシステムが存在している。

そして、かつてその先に向かえた「しゃちょう」はそのあるものを持っていた。

「ふつ、未練がましく持っていたが……こんな所で役に立つとはな」

「しゃちょう」は自嘲気味に笑いながら、胸ポケットからあるものを取り出す。

カジノタワーの代表者の名刺だった。つまり、5階以上の部屋は「一見さんお断り」ということだ。カジノタワーの代表者である、カルベ氏の直筆サイン入りの名刺を見せれば、奥に行けるわけだ。「しゃちょう」はその名刺を眺めながら、

「ワシの経歴も、あながち無意味ではなかったということか？」と呟いた。

深く息を吸い込む。そして、ゆっくりと吐き出す。

吐き出した息の中に、鉛でも入っているのかと思うほど重く感じた。

（これほどまでのプレッシャーは、α社との合併を決断する前夜ぶりかな？）

「しゃちょう」は腹をくくり、左手に握り込んだ3枚のコインを握りしめた。

つづく……

第4話 「未来は僕らの手の中・中編」(前書き)

妙にこのタイトルが続いていますが、とくに理由はありません！

第4話 「未来は僕らの手の中・中編」

第4話 「未来は僕らの手の中（中編）」

「そろそろ15分だ。ユウキ」

リュウタが見ていた懐中時計を胸ポケットにしまい込みながら、ユウキに声をかける。

ユウキは黙ったまま頷くと、背負ったリュックサックからニット帽を取り出し、深く被った。

そして、何やら特殊な樹脂で覆われている真っ黒な手袋を両手にはめ、同じく、特殊な樹脂で加工されているブーツに履きかえ、装備と整え始めた。

3人は街の中でも、特に寂れた宿屋にいた。

彼らが演じているのは、あくまで観光者であり、この街にいるのは思い出作りのためだということを装わなければならないのだ。ましてや、未成年の彼らが高級ホテルに宿をとるものなら、こぞつて怪しんだ警察官やら、裏の人間やらが襲ってくるのは間違いないのである。

「今日の長さは？」ユウキがブーツの紐をしっかりと結びながら、尋ねる。「40……いや、50メートルかな？」とカズキが言った。

リュウタが「50」と書かれたロープをユウキに差し出す。そして、

「いいか？ お前が今回のキーマンだ。お前の技術が今回の成功を呼ぶ。お前は天才だ。お前にやって出来ない事など、この世にはひとつとしてない」

と暗示をかけるように、静かに言う。すると、ユウキの目が一瞬だけ、深い赤色に染まり、やがて、元のブラウン染みた目に戻っていく。しかし、表情はいつもの彼とは違い、どことなく狂気をはらんでいるようだった。

「了解……俺にまかせておけ」とユウキは笑った。

ユウキは一人で宿を出た。

天気はやっぱり崩れて、雲っている。どす黒い重たそうな雲が太陽を覆い隠し、辺りは心なしか闇が立ち込めているようだ。それに、時間も時間だ。そろそろ月が出たって不思議じゃない。この分だと彼の仕事はやりやすくなりそうだった。

その頃、「しゃちょう」は番人の前に立っていた。

「なんだ、お前は？」屈強な肉体の番人が、無愛想に言った。

「しゃちょう」は無言で、少しうつむき加減のままに、例の名刺を差し出した。これで、ここを通る事が出来るはずだ。そう確信しながらも、「しゃちょう」の背中には嫌な汗が滝のように流れ出ていた。悟られないよう、細心の注意を払わねば。

「お前、長い事ここを訪れていないようだな」

冷たい目をした方の番人が、氷のような目を「しゃちょう」に向ける。「!？」

「知らないようだから教えてやろう。実はな、この名刺の偽モノが出回ったことがあってな。しかも、物凄く細かく再現してあるのが作られたんだよ。だからな、もうこれは仮に本物であっても使えないんだよ。今は誰も6階には通してない。悪いが、お引き取り願おう」

冷たい目の番人が申し訳なさそうに言うと、屈強な方の番人が豪快

な笑い声をあげた。

（少々面倒な事になったぞ……。しかし、この場は一旦引き下がるしかないな）

あまりに粘ると逆に怪しまれる。とりあえず、五階のカジノルームに戻ることにした。

室内のいたるところに設置されているベンチに腰をかけた。「しゃちょう」は大きなため息をつく。本来の目的である「絵本探し」どころか、その目的達成のための起爆剤である「仲間」を得るための目的さえも果たせないかもしれないのだ。自然にため息は大きくなる。

タバコでも吸おうと、腰かけていたベンチからほど近い窓に向かった。

外の風景でも眺めながら一服つけられれば、少し気分転換できると思ったのだ。

尻ポケットからくしゃくしゃになったタバコの箱を取り出す。

お気に入りのブルーのパッケージだ。別に味だとか香りだとかが気に入ったのではない。単にこのブルーの色具合が気に入ったので、この20年ほど吸い続けている。

「しゃちょう」は目を細めて、窓の外に広がる風景を眺めた。

しかし、外はあいにくの空模様に乗まって、街全体もひっそりと陰気くささが増していた。

心なしかドブの匂いがした気がした。

それでも何となく外を眺めていると、横目に何かがちらつくのに気

がつく。

はっとして覗き見ると、誰かがいた。誰かが壁にしがみついて、上へと昇っているのだ。よく見るとその誰かは命綱らしきものもついている。さらによく見ればそれはユウキだった。

彼はとくに必死という様子もなく、「しゃちょう」の驚嘆の視線に気づいたのか、片手を放してピースサインを送ってきた。放心したまま、「しゃちょう」もピースサインを返した。

しかし、少し冷静さを取り戻した「しゃちょう」は焦った。

このタワーは6階が最上階だ。おそらくユウキは最上階の窓から侵入しようと考えているだろう。しかし、「しゃちょう」の記憶では最上階フロアの窓は、開閉出来ないような構造で、決して開く事はないはずだった。となると、ユウキは今度は5階から侵入してくるのではないかと考えたのだ。

それはどう考えてもマズイ。人目につき過ぎる。

いくらギャンブルに熱を注いでいる人たちがほとんどと言っても、さすがに窓の外から誰かが侵入してくるなんて、誰かが気付く。そうじゃなくても、このフロアにも10名以上の警備員と、やはり私服警備員も紛れているはずなのだ。

（ワシが何とかしなければ……。しかし、どうやって……）

これほど緊迫した場面で、脳をこれほど速く回転させたのはいつぶりだろうか。「しゃちょう」はとにかく考えを巡らせた。ユウキを危険な目に合わせずにタワー内に侵入させる方法を考えた。

そんなとき、「しゃちょう」の視界にあるものが入ってきた。

（これだっ！！）

これから自分が起こす一連の行動のプロセスが、完璧に思い浮かんだ。

「しゃちょう」はひとり、微笑みを浮かべていた。

つづく……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8396h/>

絵本を追うしゃちょう

2010年10月11日04時54分発行